仮説と検証10

授業でもお話した通り、この授業の重要なテーマは、「なぜ学ぶか」です！みなさんはどう考えるでしょうか？

今回の講義では、友達の友達の友達について学びました。最後の映画では、ドイツで起きた共産党か十字党かの選択などは私たちの身に起きえることだと思いました。先生が言うように、どちらかの選択をせまられるとき、選択をしたいことを選んでしまうけれど、選ばなければいけない場面もでてくると思いました。その時、みんなが選んでいるから。他の人もこうしているから。など、選択を他人に左右されるのではなく、自ら考え、自ら選択し、行動していく必要があるのだと思いました。この授業で映画をみて、流されず、選択していかなければと思いました。

← その通りですね。選択しないで見ていると、誰かの選択だけが際立って見えます。それが普通な感じになると、それがアンカーになり、そしてソーシャルプルーフによってそれに賛同しやすくなります。止められない正のフィードバックに巻き込まれていきそうです。そのときに備えて、私たちには何ができるのか？

ヒトラーの独裁を誰も止める事ができなかったのは、反対の先に「死」があるからだと考える。人間誰しも殺される事を前に正義を主張する事は難しいのではないかと考える。これは、第比の爆発的増加にも繋がるなとも気づいて、誰も反対する人がいなかったから、「生まれる」方を暗黙的に選んだのだと考える。この第比の増加の恐ろしい側面があると考えていて、気づいた時には歯止めの効かないところにあって、それが結果的に何百人もの死者を産んでいる。今の時代は、割と、自分らしい姿が求められている割には、それによって、バッシングを激しく受ける人もいて、自殺する人もいる。同調する人が多いと、それらが優位になってしまう所が面白くないなと考えている。

→ ヒトラーの独裁を止められなかったことに対して、確かに恐怖政治によって反対しづらかった側面があります。その一方で、非常に高い支持率があったことも忘れてはなりません。国家の権力は、独裁政治といえども、国民の支持がなければ維持できません！同調によって優位になると反対意見が言えない状況にならないようにするためには？

最後に見た映像では、人々の選択が、どのような結果につながるのか、なにも選択することなく、危険なことでも、なにも反対する選択をしない、そんなことを私がその場にいて、選択をせまられたとしても、なにかできる自信が今の私には無いと感じた。

自分もやっていいという思考におちいってしまうのは、個人の性格の問題ではなく、その場の雰囲気、自分の状態によって変わってしまうのだと考えた。

みなさんは、大学在学中に「悪の凡庸さ」という言葉を学ぶ人が多いと思います。ナチの重大犯罪を犯した人々が「普通」の人々だったから生まれた言葉です。しかし、戦後、当然、本人が無自覚であったとしても、犯罪者は厳しく断罪されます。「あれは自分じゃなかったんだ」は通用しません。

人生という戻れないたびの選択をよいものとするための選択日記というものは簡単にできることでありながら、必ずしもやらないなと考えた。また、ドイツのナチ党やヒトラーの独裁暴走といったことは、第比大戦後の不況から始まり、国民がたんだんとヒトラーを肯定していく結果という、正のフィードバックの力は大きなもので、危ない要素があると考えた。

今回の授業で、爆発的な数の増加やフィードバックについて学ぶ中で、身近な現象とも深く関係していると感じた。特に好循環、悪循環で結果が大きく変わることが印象に残った。

映像は、自分自身反省することもあった。社会科の勉強が苦手な私だが、そこで無関心になってしまうことであのような出来事を作りだす一人になってしまうかもしれないと思った。

学生の皆さんは「二度目は喜劇」を「1度目は悲劇だが、学んだので2度目は楽勝」と考えました。それが一般認識と異なることはお伝えしましたが、いずれにしても学ぶことが無ければ、繰り返してしまうのではないでしょうか？

ヒトラーはフランス革命時の群集心理を学び、人心の扇動の方法を学びました。対抗する知識を持たないと、再び同じ過ちを繰り返しそうです。